

# 自己確証動機が友人に感じる魅力に及ぼす影響

—自己評価を行う領域重要性との関連から—

射場 元気

(有馬ゼミ)

自尊心または自尊感情には様々な解釈があるが、一般に自分をポジティブな存在であると思うことについてはコンセンサスが成立している（遠藤，1992）。しかし、親密な他者に対して常にポジティブな自己を見せようとしているとは考えられない。自己にとって重要でない領域であれば、ネガティブな側面を見せた方が、無理をしないでいられる対人関係と認知される場合もあるだろう。

本研究は、自己評価を行う領域の重要性に応じて、自己呈示動機がどのように変化するかを検討しようとするものである。

**評価領域の重みづけ** Shavelson, Hubner, & Stanton (1986) の単純加算モデルでは、様々な自己評価の総計が自尊心であると捉えられてきたが、Harter (1986) の重みづけモデルでは、個人にとって重要性の高い領域に比べて、重要性の低い領域における自己評価は自尊心にほとんど影響を与えないと考えられている。

重要領域における重みづけは、自己評価だけではなく、他者評価と自己評価の関係にも影響する。長谷川 (2007) は自己評価、重要性に加え、同性の友人からの実際の評価、反映的自己評価（友人からの評価の推測）と自尊心との関係について検討した結果、自尊心の形成過程には、従来の重みづけモデル（Harter, 1986）で示されたような個別的自己評価とその重要性だけではなく、他者からの評価や反映的自己評価を考慮する必要があることを示唆している。

谷口・大坊 (2008) は恋人関係における自己呈示は、関係を維持するうえで重要な領域では自己高揚的である一方、関係を維持するうえで重要でない領域では自己確証的であると結論付けている。谷口の研究では恋人から自己認知よりもポジティ

ブな評価を恋人から得ていると推測しているにもかかわらず、その評価が正確であると認識されている。これはSwann (2002) 戦略的自己確証モデルで説明が可能である。すなわち、よりポジティブな評価を得られる他者と親密な関係を構築することによって自己確証を行おうとする仮説である。

**自己確証動機** 自己確証動機とは、自己概念を他者との関係性において実現させようとする動機である。よって、ネガティブな自己概念を持つ人であれば、ネガティブなフィードバックを求めると予測される。しかし、自己高揚動機からは、どのような自己概念を持つ人であっても、ポジティブなフィードバックを求めると予測される。この点において、自己確証動機と自己高揚動機は対立するものとなる。Swannはこの矛盾点について、それぞれの対人関係において、重要性の高い領域であれば自己評価にかかわらずポジティブなフィードバックを求めると予測されている。恋人関係における自己確証過程を検討した研究（Swann, 2002）では、外見的魅力という重要性の高い領域については、恋人から自己認知よりも高い評価を得ていると認知していること、さらに、その評価が正しいと認知している結果が示されている。Swannはこの結果について、親密な他者との関係においては、自己認知よりも高い他者評価を正確なものと認知することによって、自己高揚動機と自己確証動機を同時に満たしていると考察している。日本では谷口・大坊 (2008) が同じ項目を用いて日本人の恋人関係について検討を行い、同様の結果を見出している。

またSwannは同性の対人関係についても検討し

た結果、美術の先生には運動能力よりポジティブな芸術的な能力の評価を求める一方で、スポーツのチームメイトには芸術的な能力よりポジティブな運動能力の評価を求める結果を見出しており、関係において重要な領域に高い評価を望むのは、恋人関係に限られたものではないことが示されている。

本研究では、日本人大学生の友人関係について、Swannの仮説が成立するかを検討する。Swannの研究に従って、自己評価よりも他者評価の方が高いと認知されている場合を、自己高揚動機が満たされた状態であると操作的に定義する。自己評価よりも他者評価の方が高く、かつ、他者評価が正確であると認知されている場合を、自己高揚動機と自己確証動機が満たされた状態と操作的に定義する。自己高揚動機と自己確証動機が同時に満たされた状態において、友人との関係満足度および、友人に対する魅力度が最も高く見出されることを仮説として、Swannの仮説を検討する。また、これらの項目を用いて、友人関係における満足感に及ぼす自己呈示動機の影響について、探索的な分析を行う。

## 方 法

**調査回答者** 大学生65名（男性33名、女性32名）。回答に不備のあった参加者1名を除いた64名（男性33名、女性31名）を分析の対象とした。平均年齢は20.40歳（SD=1.035）、範囲は18~23歳であった。

**実施方法** 京都学園大学の講義の受講者に、質問紙を配布し回収した。

**調査時期** 2011年12月13日に調査を実施した。

**調査項目** (1) 関係満足度：Rusbult, Martz and Agnew (1988)の投資モデル尺度の邦訳版(中村, 2002)のうち一部を、想定した同性の友人との関係満足度を測定する尺度として使用した。この尺度は関係満足度2項目(「私は相手との関係に満足を感じている」, 「相手との関係は私をととても幸せにしてくれる」), 投資量2項目(「相手との関係が終わったら、私が費やした多くのものは失われてしまうと感じる」, 「他の誰よりも、私はかなり多くのことを相手との関係に費やしている」), 代替肢の質2項目(「相手以外の誰かと関わりを

持つことを非常に求めている」, 「相手以外の人との関係が私にとっては魅力的だ」), コミットメント2項目(「私は相手との関係が長く続くことを望んでいる」), 「私は何年間か先まで相手との関係を創造することが可能だ」)の下位因子によって構成されている。回答は、「1:全くあてはまらない」~「7:かなりあてはまる」の7件法で求めた。

(2) 友人の魅力：西浦・大坊(2010)によって収集・選定された友人の魅力の10項目を、(1)で想定した同性の友人に感じる魅力を測定する尺度として使用した。

この尺度は安心感4項目(「気兼ねしないでいられる」, 「飾らない態度で接してくれる」など), よい刺激3項目(「向上心がある」, 「自分にはないものを持っている」など), 誠実さ3項目(「うそをつかない」, 「誠実である」など)の下位因子によって構成されている。回答は、「1:全くあてはまらない」~「7:かなりあてはまる」の7件法で求めた。

(3) 自己認知：SAQ (Self-Attribute Questionnaire)の10項目のうち、最初の5項目を使用した。これは1. 知的・学業的能力, 2. 社会的能力・社会的スキル, 3. 芸術・音楽の能力, 4. 運動能力, 5. 外見的魅力の各項目それぞれが、同年齢・同性の大学生と比較して自分をどのように評価しているかを尋ねた。回答は、中央値を「0:平均的である」とし、「-3:かなり下位である」~「3:かなり上位である」の7件法で回答を求めた。

(4) 友人に求める評価：SAQの5項目それぞれについて、友人にどのような人としてみられたいかを(3)と同様の7件法で回答を求めた。

(5) 友人に対する自己呈示動機の強さ：(4)で回答した自分の望むイメージを示したい程度をそれぞれ「1:全く示したいと思わない」~「7:かなり示したいと思う」の7件法で回答を求めた。

(6) 友人からの評価の推測：SAQの5項目それぞれについて、友人が回答者をどのような人と見ているかを推測させ(3)と同様の7件法で回答を求めた。

(7) 友人からの評価の正確さ：(6)で推測した友人からの評価の推測がどの程度正確であると

思うかを「1：全く正確ではない」～「7：かなり正確である」の7件法で回答を求めた。この尺度の得点が高いほど、自己認知と友人からの評価の推測との一致性に関わらず、自己確証の程度が高いと考える。

(8) 関係の重要度：SAQの5項目それぞれについて、関係の重要度（友人との関係を維持するうえでの重要度）を尋ねた。回答は、「1：全く重要ではない」～「7：かなり重要である」の7件法で求めた。

### 結 果

関係満足度の因子分析 まず関係満足度尺度の因子分析を行ったところ3因子が適当であると判断された。結果をTABLE 1に示す。

第1因子は「私は相手との関係に満足を感じている」、「私は相手との関係が長く続くことを望んでいる」、「相手との関係は私をととても幸せにしてくれる」、「私は何年間か先まで相手との関係を想像することが可能だ」などの項目に負荷が高かった。これらは全てRusbult, Martz and Agnew (1988)の投資モデル尺度の満足度とコミットメント尺度の項目であったことから、本研究では関係満足度として採用した。

第2因子は「相手との関係が終わったら私が費やした多くのものは失われると感じる」、などの項目に負荷が高かった。

第3因子は、「相手以外の誰かと関わりを持つことを非常に求めている」、「相手以外の人との関係が私にはとっても魅力的だ」などの項目に負荷が高かった。

「他の誰よりも、私はかなり多くのことを相手との関係に費やしている」の項目はどの因子にも属しないと判断した。

TABLE 1 構造行列

	因子		
	1	2	3
1. 私は相手との関係に満足を感じている	.702	.178	.021
2. 相手との関係が終わったら私が費やした多くのものは失われると感じる	.186	.869	.020
3. 相手以外の誰かと関わりを持つことを非常に求めている	-.021	.146	.600
4. 私は相手との関係が長く続くことを望んでいる	.824	.040	.044
5. 相手との関係は私をととても幸せにしている	.829	-.037	.040
6. 他の誰よりも、私はかなり多くのことを相手との関係に費やしている	.347	.028	.071
7. 相手以外の人との関係が私にはとっても魅力的だ	.044	.044	.781
8. 私は何年間か先まで相手との関係を想像することが可能だ	.669	-.128	.110

因子数：3個、最大値

情報源：Rusbult の同意を基に作り直した

Rusbult, Martz and Agnew (1988) の投資モデル尺度において第2因子は代替肢の質の尺度の項目で、第3因子は投資量の尺度の項目であったことから、満足度と関係がないと判断し本研究では採用しなかった。

友人の魅力項目の因子分析 西浦・大坊 (2010) によって収集・選定された友人の魅力の10項目を因子分析したところ、3因子が適当であると判断した。結果をTABLE 2に示す。

第1因子は「気兼ねしないでいられる」、「一緒にいるのが楽だ」、「一緒にいると落ち着く」などの項目に負荷が高いことから「安心感」と命名した。

第2因子は「うそをつかない」、「誠実である」、「努力家である」、「飾らない態度で接してくれる」などの項目に負荷が高いことから「誠実さ」と命名した。

第3因子は「向上心がある」、「思いやりがある」などの項目に負荷が高いことから「よい影響」と命名した。

「10.自分にはないものを持っている」はどの因子にも属さなかった。

TABLE 2 構造行列

	因子		
	1	2	3
1. 気兼ねしないでいられる	.794	.079	.029
2. うそをつかない	.342	.822	.118
3. 真実がある	.836	.024	.029
4. 一緒にいると落ち着く	.829	.018	.020
5. 一緒にいると盛り上がる	.728	.065	.110
6. 誠実である	.048	.911	.040
7. 努力家である	.218	.844	.040
8. 飾らない態度で接してくれる	.468	.800	.110
9. 思いやりがある	.077	.079	.741
10. 自分にはないものを持っている	.000	.000	.000

因子数：3個、最大値

情報源：Rusbult の同意を基に作り直した

SAQ 5 領域の得点 自己認知：質問 (3) におけるSAQの5領域の平均得点は1. 知的・学業的能力が-0.58 (標準偏差1.28), 2. 社会的能力・社会的スキルが-0.25 (1.62), 3. 芸術・音楽の能力が-0.36 (1.63), 4. 運動能力が-0.78 (1.53), 5. 外見の魅力が-0.98 (1.37) であった。どの領域においても理論的中央値の0を下回った。結果をFigure 1に示す。分散分析の結果、特性の主効果が見られた (F (4,252) = 3.64, p < .03)

多重比較検定を行った結果、社会的能力・社会的スキルと外見の魅力との間に有意な差が見出された ( $p < .03$ )。

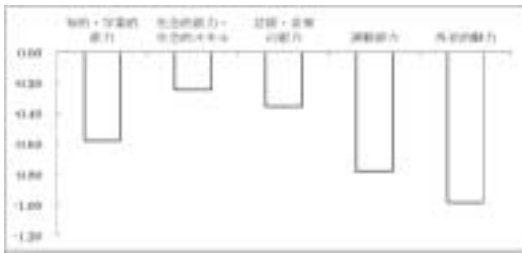


Figure 1 自己認知得点の平均

友人に求める評価：質問（４）におけるSAQの5領域の平均得点は1. 知的・学業的能力が0.41（標準偏差1.27），2. 社会的能力・社会的スキルが0.72（1.36），3. 芸術，音楽の能力が0.59（1.35），4. 運動能力が0.23（1.41），5. 外見の魅力が0.50（1.21）であった。結果をFigure 2に示す。分散分析の結果，特性の主効果が見られなかったが傾向差が見られた ( $F(4,252) = 2.28, p < .07$ )。

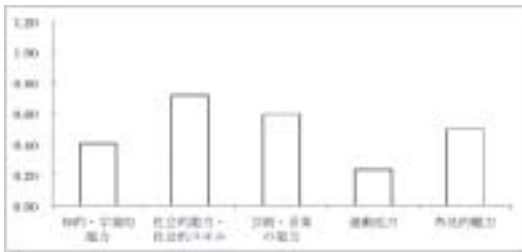


Figure 2 友人に求める評価の得点の平均

自己呈示動機の強さ：質問（５）におけるSAQの5領域の平均得点は1. 知的・学業的能力が4.42（標準偏差1.12），2. 社会的能力・社会的スキルが4.52（1.31），3. 芸術，音楽の能力が4.23（1.33），4. 運動能力が4.20（1.19），5. 外見の魅力が4.22（1.22）であった。結果をFigure 3に示す。分散分析の結果，特性の主効果は見られなかった。

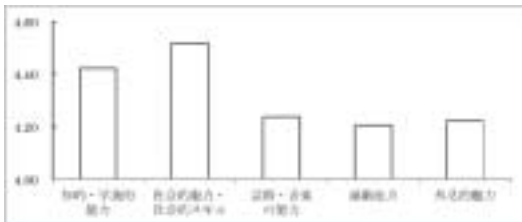


Figure 3 自己呈示動機の強さ得点の平均

友人からの評価の推測：質問（６）におけるSAQの5領域の平均得点は1. 知的・学業的能力が

-0.20（標準偏差1.35），2. 社会的能力・社会的スキルが-0.06（1.43），3. 芸術，音楽の能力が-0.13（1.45），4. 運動能力が-0.36（1.43），5. 外見の魅力が-0.43（1.31）であった。どの領域においても理論的中央値の0を下回った。結果をFigure 4に示す。分散分析の結果，特性の主効果は見られなかった。

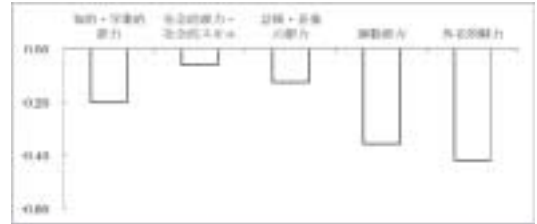


Figure 4 友人からの評価の推測得点の平均

友人からの評価の正確さ：質問（７）におけるSAQの5領域の平均得点は1. 知的・学業的能力が4.45（標準偏差1.20），2. 社会的能力・社会的スキルが4.64（1.28），3. 芸術，音楽の能力が4.45（1.32），4. 運動能力が4.63（1.36），5. 外見の魅力が4.73（1.20）であった。結果をFigure 5に示す。分散分析の結果，特性の主効果は見られなかった。

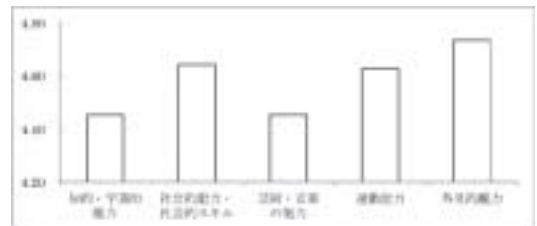


Figure 5 友人からの評価の正確さ得点の平均

関係的重要度：質問（８）における5領域の得点は1. 知的・学業的能力が3.92（標準偏差1.46），2. 社会的能力・社会的スキルが4.88（1.52），3. 芸術，音楽の能力が3.98（1.51），4. 運動能力が3.63（1.36），5. 外見の魅力が3.94（1.40）であった。結果をFigure 6に示す。分散分析の結果，主効果が見られた  $F(4,252) = 13.45, p < .01$ 。多重比較検定の結果，社会的能力とそれ以外の項目の間に有意な差が見出された。つまり，社会的スキルが他の領域より得点が高いという結果であった。

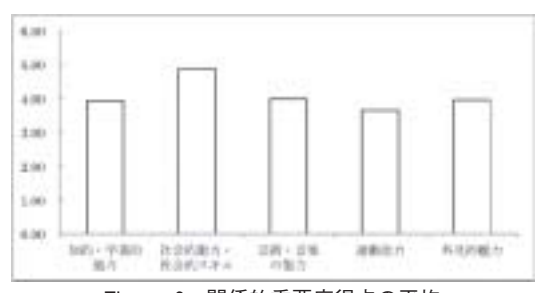


Figure 6 関係的重要度得点の平均

自己認知、友人に求める評価、友人からの評価の推測の相違 自己評価以外の指標においては、領域による平均の差が見られなかったため、すべての領域に対する評価の合計点を用いた分析も併せて行うこととした。SAQを用いた質問（3）～（7）の5領域をそれぞれ因子分析した結果、全ての質問において1因子であった。そこで自己認知、友人に求める評価、友人からの評価の各5領域を合計し比較した。結果をFigure 7に示す。自己認知の5領域の合計は-0.59、友人に求める評価の5領域の合計は0.49、友人からの評価の推測の5領域の合計は-0.23であった。分散分析の結果、自己評価要因の主効果が見られた ( $F(2,126) = 40.52, p < .01$ )。多重比較検定を行った結果、自己認知と友人に求める評価と友人からの評価の推測との間に有意な差が見出された ( $p < .01$ )。すなわち、友人に求める評価 > 友人からの評価の推測 > 自己認知の順に得点が高かった。

自己認知よりも友人に求める評価が高いことから、友人に自己認知よりも高い評価を望んでいる、すなわち自己高揚的な評価の希求がみられた。また、友人に求める評価ほどは高くないが、友人からの評価の推測が自己認知よりも高いことから、友人が自己認知よりも高い評価をしていると推測、すなわち自己高揚的な評価の推測がみられた。この結果は先行研究の結果を支持するものである。

友人からの評価の正確さ 友人からの評価の正確さは論理的に考えれば、友人がイメージしている自己と自己がイメージする自己との間の差異が小さければ小さいほど高いと考えられる。よって友人からの評価の推測得点と自己認知の得点との差が小さいほど、友人からの評価の正確さ得点が高いと考えられる。そこで友人からの（評価の推測）

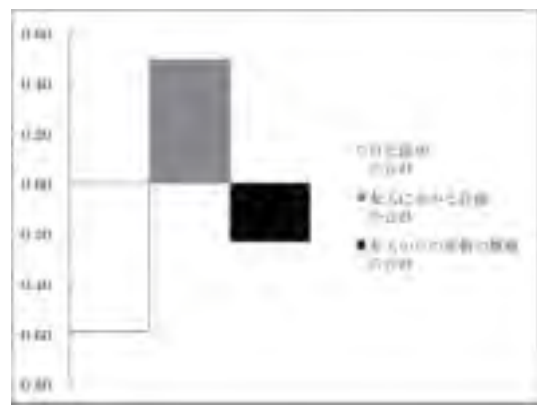


Figure 7 自己認知、友人に求める評価、友人からの評価の推測の合計得点

（自己認知）の絶対値と友人からの評価の正確さの相関を求めた。しかし結果は有意ではなかった ( $r(64) = .03, n.s.$ )。すなわち、友人からの評価が自己認知よりも高く、自己高揚的な評価の推測をしているにもかかわらず、その評価が正確であると認識しているということである。Figure 7に見られるように、友人からの評価は全体として、自己評価より高い結果が示されている。そこで、本研究においてもSwannが仮定したように、友人からの評価の正確さの得点は、自己確証動機が満たされている状態を示すと、概ねにおいてみなすことができる。

自己呈示動機と自己確証動機の比較 自己確証動機の研究では、関係性について良い影響をもたらす結果が予測される。そこで、恋人関係よりもより自己確証動機が関係性に影響しやすいと考えられる友人関係において、自己呈示動機と自己確証動機がそれぞれの程度関係満足度に影響するかとの検討を行った。その結果、満足感と自己呈示動機の強さとの間に有意な相関がみられた  $r(63) = .389 (p < .01)$ 。また満足感と友人からの評価の正確さとの間にも有意な相関がみられた  $r(63) = .284 (p < .03)$ 。満足度と自己呈示動機の強さ及び友人からの評価の正確さとの間にはどちらも相関がみられたが、満足感と自己呈示動機の強さとの間により強い相関がみられた。次に、それぞれの自己提示動機が満足感に至る過程に友人に感じる魅力が影響しているかどうかについて、パス解析により検討する。

パス解析 全体的なパス解析を行ったところ、Figure 8のような関係になった。

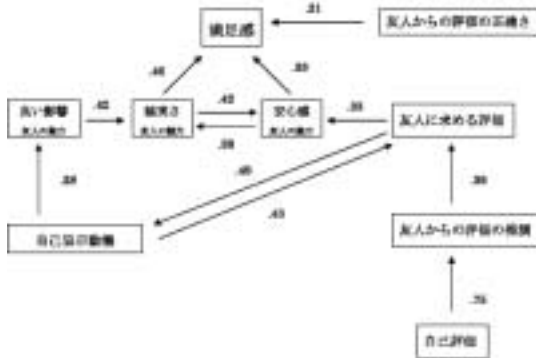


Figure 8 パス解析

図中の満足感は、関係満足度第1因子に高く負荷した項目の合計点，安心感・誠実さ・良い影響は、友人魅力項目の第1，第2，第3因子に高く負荷した項目の合計点，その他の項目は、いずれも5領域合計点である。

友人からの評価の推測は自己評価からの強い影響がみられ、本研究でも谷口・大坊（2008）と同様の結果を得た。自己評価は友人からの評価の推測を規定していると言えるだろう。

自己確証動機は単独で満足感に同程度影響を及ぼしており、高いほど満足感が高くなっている。パス解析の結果からは、自己呈示動機は友人との魅力を媒介として満足感に影響を及ぼしている。

自己呈示動機は、友人にどの程度の高い評価を求めるかという評価欲求と相関がみられる。しかし、自己呈示動機は友人の魅力としてのよい影響、誠実さを媒介変数として満足感に至っているが、評価欲求は安心感を媒介変数として影響を及ぼす。自己確証動機は友人の魅力との関係はみられない。以上の結果は、友人が自己を正しく評価していると推測することで安心感が生まれ、友人関係に満足を感じるという本研究の仮説を支持しないものであった。

そこで、自己確証動機についてさらに詳しく検討するために、友人からの評価の推測と自己評価の差をとり、友人からの評価の推測のほうが高い群を高評価群、友人からの評価の推測のほうが高い群を低評価群とした。さらに、友人から評価の正確さを中央値によって2群にわけて高群と低群に分割した。これらの2×2の分散分析により、

満足感および友人魅力に及ぼす影響を検討したところ、友人の魅力の安心感について交互作用効果が見出された ( $f(59,1) = 43.03$   $p < .05$ )。結果をFigure 9に示す。

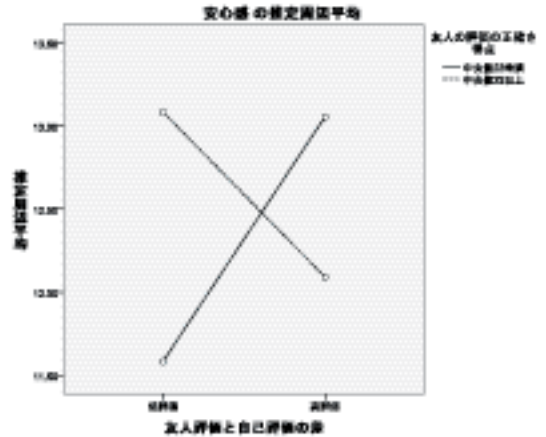


Figure 9 友人の評価の正確さ，友人からの評価—自己評価，安心感

友人からの評価の正確さが高いと認識している群においては、友人が自己認知より高く評価していると推測している場合のほうが、友人が自己認知より低く評価していると推測している場合よりも安心感が高い。一方、友人からの評価の正確さが低いと認識している群は、友人が自己認知より低く評価していると推測している場合よりも、友人が自己認知より高く評価していると推測している場合の方が安心感が高い。

重要領域と非重要領域 SAQの5領域における重要領域、非重要領域別にパス解析を行ったところ、重要領域と非重要領域では異なる因果関係が示唆された。重要領域については満足感に対して自己呈示動機の強さの影響がみられた ( $\beta = .30$ ,  $t = 2.45$ ,  $p < .30$ ,  $r^2 = .09$ )。しかし非重要領域については安心感に対して友人に求める評価の影響がみられた ( $\beta = .26$ ,  $t = 2.11$ ,  $p < .05$ ,  $r^2 = .07$ )。また、代替肢の質に対しては非重要領域における友人の評価の正確さの影響がみられた ( $\beta = .32$ ,  $t = 2.65$ ,  $p < .01$ ,  $r^2 = .11$ )。そこで先ほどと同じように、友人からの評価が高評価群、低評価群と友人からの評価の正確さ高群、低群の2×2のセルに分割した分散分析により、代替肢の質に影響があるかを検討したところ、代替の質に対して友人からの

評価の正確さに主効果がみられた。結果をFigure 10に示す。

友人からの評価の正確さが高いと認識している群は、低いと認識している群と比べて代替肢質の得点が高い。

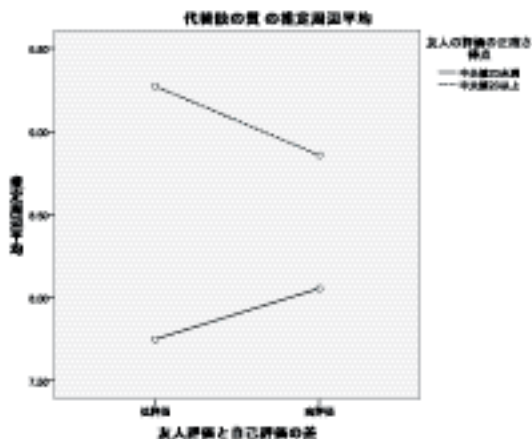


Figure 10 友人の評価の正確さ、友人からの評価—自己評価、代替肢の質

自己高揚的な評価の希求と自己高揚的な評価の推測 友人に求める評価の得点から自己認知を引いた得点と、友人から自己高揚的な評価を求める傾向の指標とした。また友人からの評価の推測の得点から自己認知を引いた得点を、友人から自己高揚的な評価を得ているという推測の指標とした。両者を比較すると自己高揚的な評価の希求の得点が自己高揚的な評価の推測の得点よりも高かった (F (1,65) = 12.03, p<.01)。友人は自己認知よりも高く評価していると推測しているものの、それよりも高い評価を求めているという結果となった。自己高揚的な評価の希求の得点は1.08 (標準偏差1.08) であった。つまり自己認知よりも1.08だけ自己高揚的な評価を友人に求めているということになる。また自己高揚的な評価の推測は0.36 (0.72) であった。つまり自己認知よりも0.36だけ自己高揚的な評価を友人からされていると推測しているということになる。

また、外見的魅力の自己認知はSAQの5領域の中で最も得点が低かったが、外見的魅力の自己高揚的な評価の希求は外見的魅力以外の領域の平均よりも高い (F (1,63) = 11.34, p<.01)。すなわち外見的魅力の自己認知はその他の領域の自己認知よりも友人から高い評価を求めていると言える。

自己高揚的な評価の推測も同様に、外見的魅力が外見的魅力以外の領域の平均よりも高いという傾向がみられた (F (1,63) = 3.06, p<.08)。つまり外見的魅力の自己認知はその他の領域の自己認知よりも友人から高い評価を得ていると推測する傾向がある。

	外見的魅力	外見的魅力以外の領域平均
自己高揚的な評価の希求	1.48 (1.53)	0.98 (1.07)
自己高揚的な評価の推測	0.56 (1.31)	0.30 (0.71)

### 考 察

友人から求める評価について 本研究ではまず、自己認知と友人に求める評価を比較することで友人に求める評価が自己認知よりもポジティブであるかネガティブであるか検討した結果、友人に求める評価は自己認知よりもポジティブであった。谷口・大坊 (2008) は、恋人からは自己認知よりもポジティブな評価を求めるという結果を示したが、本研究では友人関係においても同様の結果を得られた。自己認知よりポジティブな評価を友人に求めていることから自己高揚的であると言える。この傾向は外見的魅力において顕著で外見的魅力以外の領域よりもポジティブな評価を希求していた。外見的魅力は第一印象と言われるように、印象形成において最初に注目される部分である。すなわち外見的魅力は他の領域と比べ、ポジティブであるほど自尊心を高めることが容易であるため友人においてもポジティブな外見的魅力の評価を求めるのであると考えられる。

友人からの評価の推測について 自己認知と友人からの評価の推測を比較することで友人からの評価が自己認知よりもポジティブであるかネガティブであるか検討した結果、友人からの評価の推測は自己認知よりもポジティブであった。谷口・大坊 (2008) は、恋人からは自己認知よりもポジティブな評価を得ていると推測しているという結果を示したが、本研究では友人関係においても同様の結果が得られた。自己認知よりポジティブな評価を友人から得ていると推測していることから自己高揚的であると言える。この傾向は外見的魅力において顕著で外見的魅力以外の領域よりもポジティブな評価を得ていると推測していた。しかし、友

人に求める評価ほど高い評価を得ていると推測しているわけではなかった。つまり自己認知よりも自己高揚的な評価を友人から得ていると推測しているものの、更に高い評価を求めていると言える。

**友人からの評価の正確さ** 友人からの評価の推測と自己認知の差の絶対値が友人からの評価の正確さと相関があるか検証したところ、相関はみられなかった。つまり自己認知よりも友人からポジティブな評価を得ていると推測していてもそれが正確であると認識している。この結果は一見矛盾しているように思われるが、Bosson & Swann (2001) および Swann, Bosson, & Pelham (2002) が提案した戦略的自己確証モデルで説明が可能である。このモデルでは、親密な他者には、親密でない他者に対するよりもポジティブな自己を提示したとしても、親密な他者からはポジティブな評価を受けるに値すると考え、親密な他者から自己認知よりもポジティブな評価を受けてもそれを正確な評価であると認識すると説明している。本研究の結果は戦略的自己確証モデルを支持する結果であった。

**パス解析** パス解析の結果、友人からの評価の正確さは安心感を媒介とせず、直接満足感に影響していた。つまり友人からの評価が正確であると認識することで安心感が生じ、関係に満足を感じるという本研究の仮説は支持されない結果となった。代わりに、友人に求める評価が安心感を媒介とし満足感に影響するという結果であった。つまり友人にこのように見られたいと思うことで安心感が生じ、満足を感じていると考えられる。

一方自己呈示動機はよい影響から誠実さ、誠実さから満足感に影響していた。また友人に求める評価とも相互に影響していた。つまりこれは友人関係における自己呈示が自己高揚的であれば自己確証的ではなく、また自己確証的であれば自己高揚的ではないといった相反するようなものではないと考えられる。

**分散分析** 友人の評価の正確さの高群・低群、友人からの評価の推測が自己認知より高い群・低い群、に分けた2×2の分散分析の結果、安心感に

対して交互作用がみられた。

友人からの評価の正確さが比較的高いと認識している群は、友人が自己認知より高く評価していると推測していると、安心感が低かったのは、現在のところ友人は自己認知より高く評価しているが、その評価の正確さから将来的に現在ほどポジティブな評価を得られなくなるかもしれないと安心感が低くなるのではないかと考えられる。一方、友人が自己認知より低く評価していると推測していると、安心感が高いのは、現在のところ友人は自己認知より低く評価しているが、その評価の正確さから将来的には現在よりポジティブな評価を得られるであろうと認識し安心感が高くなるのではないかと考えられる。

友人からの評価の正確さが比較的低いと認識している群は、友人が自己認知より低く評価していると推測していると、安心感が低いのは、現在友人は自己認知より低く評価していると推測していて、その評価の正確さの低さから今後も高い評価が望めないことで安心感が低くなるのではないかと考えられる。一方、友人が自己認知より高く評価していると推測していると、安心感が高かったのは、現在友人は自己認知より高く評価していると推測していて、その評価の正確さの低さから今後も高い評価を維持できると確信し安心感が高くなるのではないかと考えられる。

また、代替股の質に対して友人からの評価の正確さによる主効果がみられた。友人からの評価が正確であると認識している群は、正確でないに認識していない群と比べ、代替股の質の得点が高かった。つまり友人からの評価が正確であると認識していると、その友人以外の関係も求めることを示している。これは想定した友人の評価が正確であるために、自己認知よりポジティブな評価が得ることが難しいと認識しているからではないだろうか。それゆえ自己認知よりポジティブな評価を得られる関係を求めているのではないかと考えられる。

**関係的重要度** 恋人関係において外見的魅力が重要視されるのに対し、同性の友人関係では社会的スキルが重要であることが示された。恋人関係では生殖能力に関係する外見的魅力が重要視される。



その点で同性の友人関係では外見的魅力が考慮されないであろう。むしろ人として社会の中で適応的に生きるために必要な能力が友人関係に限らずあらゆる対人関係において重要だからと考えられる。

本研究では個人が関係を維持するうえで重要と考える領域と重要でない領域に分け、それぞれが及ぼす影響を検討した。重要領域においては、自己呈示動機の強さが満足感に対して影響を及ぼしていた。すなわち関係において重要な領域において自己呈示動機が強くなるほど、友人関係に満足していることを示している。これは想定した友人が、自分の望むイメージを実際に見せたいと思えるような関係であることで関係に満足していたのではないかと考えられる。非重要領域においては、友人に求める評価が安心感に対して影響を及ぼしていた。すなわち関係においてあまり重要でない領域においては友人に求める評価が高くなるほど、友人に対して安心を感じていることを示している。これは想定した友人が、自分の望むイメージを友人に持ってほしいと思えるような関係であることで安心を感じているのではないかと考えられる。

## 謝 辞

本論文作成にあたり、貴重な意見を賜りました京都学園大学人間文化学部心理学科有馬淑子准教授に深く感謝いたします。

## 引用文献

- Bosson, J. K. & Swann, W. B., Jr. (2001). The paradox of the science chameleon: Strategic self-verification in close relationships. In J. Harvey & A. Wenzel (Eds.), *Close romantic relationships*. Mahwah, NJ, US: Lawrence Erlbaum Associates, Publishers. Pp. 67-86.
- 遠藤由美 (1992). 自己認知と自己評価の関係—重みづけをした理想自己と現実自己の差異スコアからの検討—実験社会心理学研究, 40, 157-163.
- Harter, S. 1986 Processes underlying the construction, maintenance, and enhancement of the self-concept in children. In J. Suls, & A. G. Greenwald

(Eds.), *Psychological perspectives on the self*. Vol.3 Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates. Pp. 137-181.

- 長谷川孝治 (2007). 個別的自己評価が自尊心に及ぼす影響: 重要性と他者からの評価の調整効果 人文科学論集. 人間情報学科編 41, 91-103
- 西浦真喜子・大坊郁夫 (2010). 同性友人に感じる魅力が関係継続動機に及ぼす影響—個人にとって重要性の観点から— 対人社会心理学研究, 10, 115-123
- Shavelson, B. J., Hubner, J. J., & Stanton, G. C. 1976 Self-concept: Validation of construct interpretations. *Review of Educational Research*, 46, 407-441.
- Swann, W. B., Jr., Bosson, J. K., & Pelham, B. W. (2002). Different partners, different selves: Strategic verification of circumscribed identities. *Personality and Social Psychological Bulletin*, 28, 1215-1228
- 谷口淳一・大坊郁夫 (2008). 恋人関係における自己呈示は自己確認的か自己高揚的か 社会心理学研究, 24, 11-22.